# あるむぜお

府中市郷土の森博物館だより
al museo
2022 年 9 月 20 日
No.141

復元工事が完了した頃の旧田中家住宅。道に植えられているケヤキの木がまだ小さく、瓦屋根や壁も真新しい。

もくじ

1-2　復元建物、郷土の森に建つ
その 6…旧田中家住宅
3　最近の発掘調査
美好町で発見された 3 棟の竪穴建物
4-5　NOTE
府中のトイレ事情今昔
6　展示会案内
企画展　ちょっとむかしのくらし　その 5
7　多摩川今昔
②江戸時代の上納鮎
8　太陽系惑星ツアー
⑥土星と言えば…？

## 復元建物、郷土の森に建つ

府中市郷土の森博物館には、現在 8 棟（とう）の建物が移築・復元されています。小学校や役場・民家・商家等、江戸時代から昭和にかけてつくられた特徴的なものばかりです。ここでは、各建物について移築・復元された頃の写真でふりかえりつつ、それぞれの特色を 8 回シリーズで紹介します。

### その 6…旧田中家住宅

郷土の森がオープンしてから 2 年後の 1989 年（平成元）3 月、復元工事がほぼ完了した旧田中家住宅です。複数の土蔵（どぞう）を有する広い敷地の大邸宅（たくだいてい）であったため、1987 年に着工してから完成まで 1 年 3 か月の期間を要しました。

# 復元建物、郷土の森に建つ

## その 6…
## 旧田中家住宅

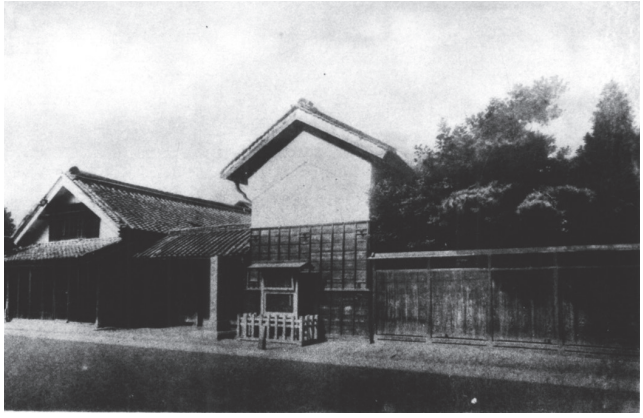
江戸時代後期から明治時代にかけての府中を代表する商家として移築・復元されたのが、今回紹介する旧田中家住宅です。旧甲州街道に面し、店舗を構えた大規模な建築物です。創建年は定かではありませんが、江戸時代後期に遡ると考えられています。

郷土の森博物館の本館を背にして進んでいくと、左側に長い土蔵造りの建物が続きます。これはすでに旧田中家住宅の一部ですが、正面入口はその先の十字路を左折したところにあります。全体の敷地は、間口に対して奥行が長い短冊状になっていて、これは江戸時代の宿場町でよく見られる特徴です。

この建物は、かつて地元で「行在所」と呼ばれていました。行在所とは、天皇が宿泊した場所を意味する言葉で、旧田中家住宅は 1880 ～ 84 年（明治 13 ～ 17）にかけて明治天皇が兎狩りや鮎漁見物のためにこの地域を訪れた際に使用されました。1933 年（昭和 8）には、明治天皇の聖蹟として国の史跡に指定され（戦後解除）、1940 年には府中町有財産となりました。移築・復元後の正門前にも「明治天皇府中行在所」と刻まれた石柱がたっています。

戦後には府中町により管理が続けられていましたが、古くなった建物などは徐々に取り壊され、駐車場や空地となっていきました。しかし、明治天皇が宿泊した「御座所」だけは解体されず、残されていました。敷地内が荒れていくにつれ、この御座所の長期保存を望む声があがっていきます。そして明治天皇が宿泊したという価値だけではなく、表店（店舗）と、それとともに並び建つ土蔵、商家としての生活機能を想像できる調理場など、大店の雰囲気を復元するのに最適な存在であるという判断がなされ、府中市郷土の森に移築・復元されることになったのです。

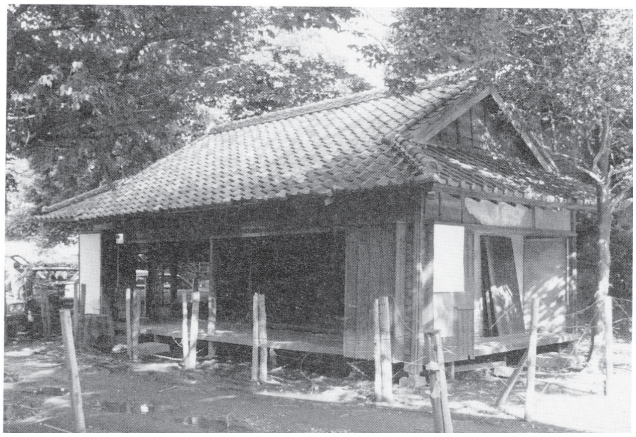
解体工事は 1983 年より行われ、それに伴いその当時には失われていた庭や建築部分に関する調査も行われました。そして、宮内庁に残る屋敷図面や写真資料などをもとにして、土蔵や表店の部分、庭などを復元することを試み、1989 年に完成し、現在に至るのです。



国の史跡に指定された 1933 年当時の旧田中家住宅

残存していなかった建物の復元は、調査成果をもとに新しい材料を使用して新築しました。その意味では、旧田中家住宅において古材を使用したのは御座所のみです。しかし、全体として府中の大店の生活をうかがうことのできる、貴重な復元建物であると考えています。

そして、ほとんどが新築だという特性は、建物の活用に役立てられています。新材を使用した部分は、厨房を備えて空調を設置し、貸し部屋や喫茶店などとしても使えるようになっています。さらにもともとあったものではありませんが、敷地隣には茶室と茶庭を整備し、茶会などで旧田中家住宅とあわせての利用を可能としています。敷地内は見学ルートが設けられていますから、新築部分と古材を使用した御座所部分を比較してみるのも面白いかもしれません。　　（佐藤智敬）

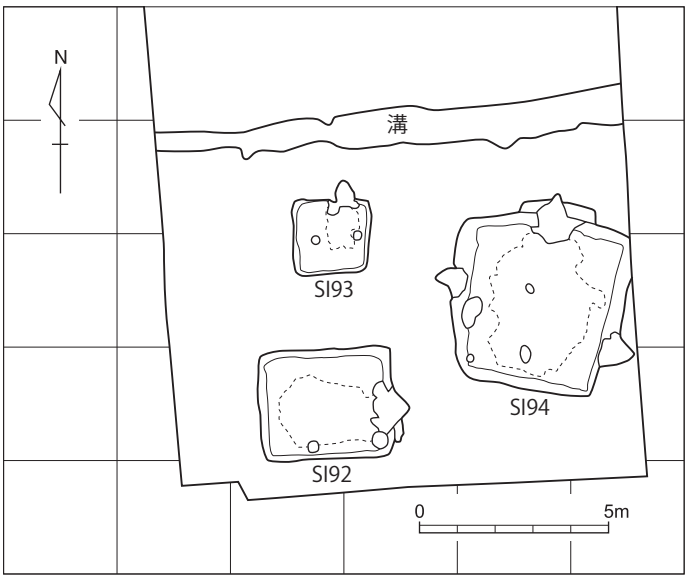


移築に伴う解体直前の旧田中家住宅御座所

最近の発掘調査

# 美好町で発見された3棟の竪穴建物

美好町1丁目　府中市ふるさと文化財課　西野　善勝




調査概略図

奈良・平安時代に築造された大・中・小の3棟の竪穴建物跡が発見されました。調査地区は国道20号線の北に面していて、近隣は戸建て住宅が軒を連ね、北東のインテリジェントパーク周辺には近代的ビルが建ち並んでいます。古代武蔵国の国府のマチの中心にある国史跡武蔵国府跡の北西約1㎞に位置し、西方約250mには古代の官道である東山道武蔵路が南北に通っています。

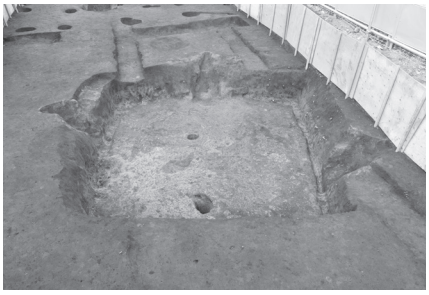
3棟の竪穴建物跡は調査地区南寄りの地表下約70cmで見つかりました。一見すると3棟の建物からなる屋敷のように見えますが、大型の竪穴建物跡がやや古く奈良時代の築造で、中型と小型の竪穴建物跡は平安時代前半の築造と推定されます。この2棟は、大型の建物があった場所をさけて、同時期に築造された可能性が考えられます。

大型のSI94は、ほぼ正方形で、竪穴が最も深く、竈が3基あり、東壁と北壁と西壁に設けられています。南壁寄りには入口施設に関係すると思われる小穴があります。中央部は固い床面が二重に形成されていたことからも、大人数での利用が考えられます。

中型のSI92は、東西方向にやや長い長方形で、深さはやや浅く、竈は東壁に設けられています。複数人が動ける広さがあり、竈寄りの床面付近で、ほぼ完全な形の土器や鉄製品が出土していて、生活感があります。

小型のSI93は、正方形で、深さは中型に近く、瓦を用いて造られた小さな竈が北壁にあり、床面には2基の柱穴があります。屋根を支えた柱であった可能性がありますが、柱穴の間には人ひとりが動けるくらいのスペースしかありません。

3棟の竪穴建物跡からは、奈良・平安時代の住まいの一端を知ることができます。また当時の暮らしぶりにも想像を膨らますことができるのではないでしょうか。



SI94　縦横 4.6 m 深さ 0.7 m

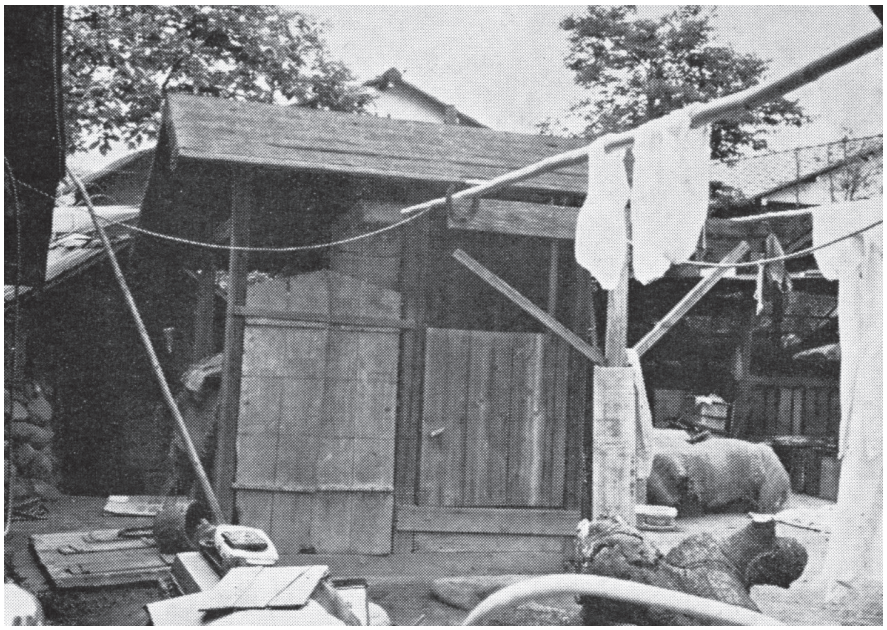
SI92　長軸 3.2 m 短軸 2.9 m 深さ 0.5 m

SI93　縦横 2.0 m 深さ 0.4 m

NOTE

# 府中のトイレ事情今昔

荒　一　能



住吉町にあった民家のトイレの外観写真
出典：『府中市史近代編資料集（1）』（1969 年　府中市）

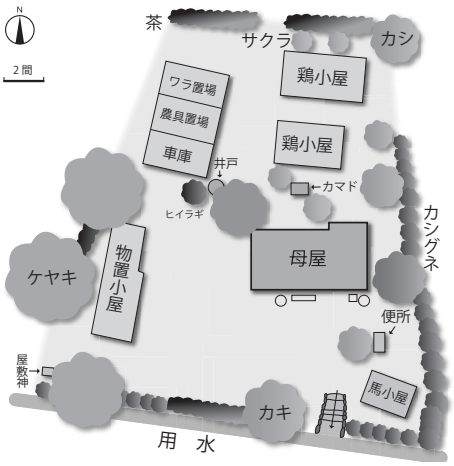
## ▼ はじめに

府中市郷土の森博物館には、稲作が中心のハケ下と呼ばれる地域にあった旧越智家住宅、畑作が中心のハケ上と呼ばれる地域にあった旧河内家住宅の母屋が移築復元されています。この 2 棟は建築年代や生活スタイルによって多少の違いはありますが、その風貌や間取りは関東地方で一般的にみられた母屋です。しかし、この 2 棟の古民家をみると、生活するための部屋はあっても、トイレが見当たらないことに気がつきます。

旧越智家住宅が移築される前の 1960 年代の屋敷図（右図）をみると、母屋以外にも農具置場やワラ置場といった付属屋、家畜を飼育する小屋があります。この図でトイレ（便所）を探すと、母屋の外に設けられていることがわかります。

## ▼ 昔の農家のトイレ事情

1969 年（昭和 44）、府中市内に当時まだ存在していた草葺民家の調査が行なわれました。調査で訪れた草葺民家のトイレは、どこでも母屋から独立して外にあったと報告されています。




移築前の越智家住宅屋敷図

その時に撮影された昔のトイレの外観写真が残っています（上写真）。周りを木の板で囲い、屋根もついています。しかし、出入口の上部は仕切りがなく、入っている人の姿がみえてしまいます。現代の壁に囲まれたトイレに慣れていると、落ち着かないように思えます。

また、現在のような水洗式ではなく、排泄物を

そのまま便器の下に溜めるいわゆるボットン便所（落下式便所）でした。一般の家屋の中にトイレが普及し始めるのは、府中市域だと明治中期以降になります。トイレは母屋に増設される形で設置されました。多くの家では、座敷からさらに奥、母屋の中のもっとも端に作られました。とはいえ、まだ外のトイレと同じ落下式です。

### ▼ トイレの成立と排泄物の利用

そもそも日本は中世後期になるまで、家々にトイレ自体がなかったようです。トイレを意味する「厠」も元は「河屋」であり、川の上に板をかけてその上で用を足し、排泄物は川に流れるままにしていたことが語源とされています。

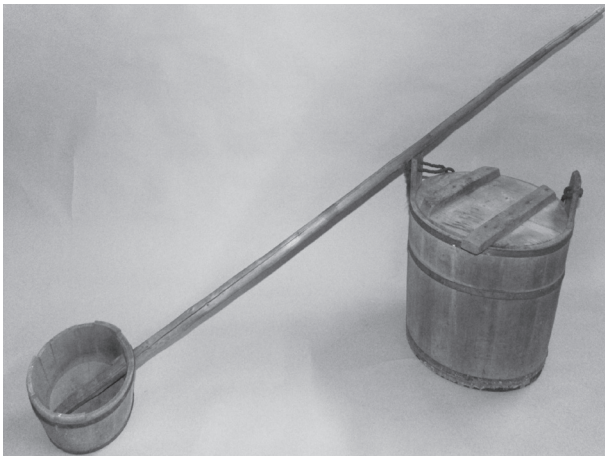
その後、特に近世になると落下式便所が普及していきます。それは衛生面からではなく、田畑にまく肥料として排泄物を利用した下肥が用いられるようになったからです。田畑へ運ぶためにも家の中より、運び出しやすい外にトイレが設けられたのでした。また、外にあることで、農作業で汚れた恰好のまま、履物を脱がずに用を足せるという利便性もありました。

ある程度排泄物が溜まると、肥汲み柄杓を使って汲み上げ、肥桶に移し替えて田畑へ運び、作物の肥料とします。もっとも、排泄物をそのまま畑にまくと作物が枯れることがあります。そのため、水や風呂の残り湯を入れて薄めたり、田畑のそばに掘った排泄物を発酵させる肥溜に一旦移してから肥料として使用していました。

### ▼ 昔の町場のトイレ事情

農家では排泄物を下肥にすることで対応しましたが、広い田畑を持っていない町場では排泄物の全てを下肥として使い切ることはできません。町場でくらす農業を営んでいない人たちがどうしていたのかというと、周辺の農家が排泄物を引き取り、下肥にしていました。

1974 年刊行の『府中市史 下巻』によると、農家は複数の町場の家と契約し、数日に一度は 3 斗（約 54 ℓ）入りの肥桶を 6 本ほどつんだ手車で排泄物を汲みに来ていました。農家では、下肥の原料である排泄物を無料で譲り受けるかわりに、町場の家へ 1 年にもち米を 2 斗ほど納めていました。それに加えて、作物や薪などを割安で販売することもありました。



肥汲み柄杓と肥桶

また、1971 年『府中市史近代編資料集（7)』によると、府中の農家が明治末期に手車や馬車で甲州街道を通って現在の新宿区や渋谷区まで行って排泄物を回収し、下肥として利用していたとあります。それほど当時は肥料が貴重品でした。

こうした下肥をめぐる町場と農村の関係は府中だけでなく、日本各地で広くみられました。

### ▼ 下水道の普及と水洗トイレの登場

そうした下肥も化学肥料が主流になった 1960 年代以降から利用されなくなりました。汲み取り式のトイレに溜まった排泄物は、農家に代わって排泄物を汲み取るバキュームカーが回収するようになります。

同時期に府中市の宅地化が進んだことにより人口が急増しました。それに伴い排泄物の回収・処理が間に合わず、河川の水質汚濁や悪臭などの衛生環境の悪化の要因となりました。

そこで府中市は、1964 年から 20 年をかけて、下水道を市内全域に設置していきます。1973 年に市内の下水処理場が完成すると、水洗トイレへの移行が推奨され、下水道の開通した地域には工事費として補助金が出されました。これにより、汲み取り式のトイレは徐々に姿を消していくことになります。

母屋の外にあった汲み取り式のトイレが屋内に移動し、その後下水道が設置され、水洗トイレが一般化しました。そして、今では温水洗浄便座を有するトイレが広く普及しています。いろいろな機能も追加され、この後どのように変わっていくのか…、少し楽しみでもあります。

展示会案内

企画展

# ちょっとむかしのくらし その5

11/12（土）～ 2023/3/19（日）　　会場：本館 2 階企画展示室

博物館敷地内にある旧河内家住宅や旧越智家住宅など、囲炉裏やかまどのある復元建物に入ると、いつでも燻された香りがします。防虫のために薪を使用して火をいれることがあるためです。その匂いを嗅いで「ああなつかしい！」と声をあげる方は多くいます。「昔の家がこんな匂いだった」「おばあちゃんのお家で嗅いだ」といった感想です。府中市域で 1960 年代より前に生まれた人であれば、薪や木炭を使用したくらしは、なつかしいと思う方が多いようです。

東京にガス灯が導入されたのは明治初期ですが、多摩地域において一般家庭にガスが本格的に引かれたのは 1950 年代になってからのことです。プロパンガスや石油コンロはそれ以前にもあったようですが、いわゆる都市ガスが府中市内の一部に導入されたのは 1958 年（昭和 33）12 月のことでした。ガスや石油を利用したコンロが流通してはいても、それ以前の府中市域において、多くの人びとが調理や風呂焚き、暖房などの熱源として利用していたのは薪や木炭だったといってよいでしょう。

ガスが家庭の中に入ってきても、木炭の利用はしばらく続きました。ガスの火で炭をおこし、七輪を使用して魚を焼いたり、長火鉢に火を入れてお湯を沸かしたり暖をとったりするほうが、効率的だったのでしょう。

木炭は、薪のような強い炎が出にくいため、例えば焼き魚などで表面だけが焦げて中が生といったことがおこりにくいのです。それゆえに木炭は重宝され、「ちょっとむかしのくらし」のなかによく登場します。木炭の改良版である練炭をつかったコンロや、豆炭を使用した行火（暖房器具）などの道具も、府中市域においては 1970 年代頃まで広く使われていました。そのため、いまでも炭を使用したくらしを懐かしむ方は多いでしょう。

長火鉢（上）と七輪（下）

とはいえ、平成も終わり、令和の時代となりました。府中に都市ガスが登場してから間もなく 65 年、オール電化でガスを使用しない家庭もある昨今、さすがに日常生活で木炭を使うことを知らない世代が多数派になってきているようです。

現在でも人びとのくらしは変化し、それにあわせて道具類も多様化し続けています。私たちが「ちょっとむかし」と考えてしまう数十年前のくらしでさえ、なつかしい、と思える人と、まったく知らずにかえって新鮮に感じる人がいるのです。

そこで今回も、そんなちょっとむかしにつかわれてきた生活に関する道具類の変遷やつかい方を、収蔵資料を通して振り返っていきます。木炭を使用する道具も、もちろん展示予定です。また、５回目となる今回は、定番の展示にあわせて、ちょっとむかしの食事をテーマにしたミニコーナーも計画しています。お楽しみに。（佐藤智敬）

# 多摩川今昔　TAMAGAWA IMA MUKASHI

## ②江戸時代の上納鮎

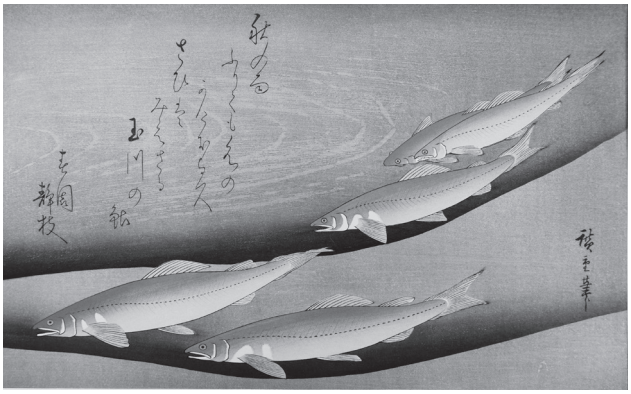
右の浮世絵は、天保年間（1830～44）に刊行された、歌川広重の「魚づくし」のうちの1枚です。このシリーズは狂歌に絵を添えたもので、ここには「秋の雨 ふりても水のかげ（影）きよく さび（錆）は見えざる 玉川の鮎」という歌とともに、澄んだ水の中を泳ぐ5匹の鮎が描かれています。この「さび」は錆鮎のことで、産卵期の「子持ち鮎」を指していると思われます。この時期の雌鮎は特に美味とされていました。

江戸時代、将軍の暮らす江戸城には、周辺からその土地の産物が上納されていました。多摩川の鮎もそのひとつで、江戸時代後期には上流域の川井村（奥多摩町）から中流域の宿河原村（川崎市）辺りまでの約50か村がこの役目を担っています。府中市域では、押立村（押立町）・中河原村（住吉町）・是政村（是政）と、連光寺村（多摩市）の一部だった下河原（南町）がこの中に含まれていました。

上納鮎の始まりは定かではありませんが、1600年代の半ばにはすでに行われていたと考えられます。当初は、将軍が食する「御菜」であることから「御菜鮎」と称され、無代で納められていました。この制度に変化が訪れたのは、8代将軍吉宗の時。改革の一環として幕府への上納物の見直しが行われ、享保7年（1722）に御菜鮎は廃止されることになったのです。

ところが、その23年後の延享2年（1745）、再び鮎の上納が命じられます。その理由は、吉宗が子持ち鮎を好んだから。この際、担当責任者となったのは、押立村の名主から代官になった川崎平右衛門でした。再開後は、以前の無代上納から買上げ制に変更され、「上ヶ鮎」という呼称が用いられました。上ヶ鮎漁の開始時期は、産卵期の鮎が上流から下流に向かう旧暦の7月下旬から8月上旬頃となり、毎年担当の役人がやって来て開始日を決定しました。

ところでこの上納ですが、多摩川沿いのすべての村が行っていたわけではありません。上ヶ鮎を



歌川広重画「魚づくしのうち 玉川の鮎」

納める「御用請村」となった村が、上納を請負っていたのです。上ヶ鮎漁の開始が通知されると、それ以外の漁が禁止され、終了まで御用請村が独占的に漁場を使用しました。つまり、鮎の上納は村々の漁業権と深く関わっていたのです。

これは御菜鮎の時も同様で、享保7年の上納廃止は、その役を担っていなかった村にとって、漁業権拡大のチャンスでした。このため、漁場を巡る村同士の争いが複数起こっています。

その一例として、享保9年の押立村と常久村（若松町）の争論を紹介しましょう。これは、廃止前に御菜鮎を上納していた押立村が、昔からの1,000間（1.81㎞）余りの漁場を常久村に侵害されたと訴えたものです。詮議の結果、以前より漁業権を持っているという常久村の主張は退けられましたが、各々の漁場は自村の前のみとされ、押立村は漁場の一部を失うことになりました。

もっともこれも延享2年までのことで、上ヶ鮎の上納が始まってからは、再び「御用請村」が優先的な漁業権を有しています。鮎は商品価値が高く、上納分以外は江戸などで売買され、人びとに現金収入をもたらしました。洪水などで不漁の年はいろいろ苦労もあったようですが、江戸時代後期の卸価格は、100尾で金1両2分くらいだったようですから、「御用請村」になるメリットは、やはり大きかったのでしょう。　（花木知子）

# 太陽系惑星ツアー

## ⑥土星と言えば…？

みなさまは、土星と言えば何を思い浮かべるでしょうか？ 多くの方は、「環（わ）」を連想したかもしれませんね。土星の環は、望遠鏡を使わないと見ることができないのですが、いつ頃からこれが環だとわかっていたのでしょうか？

望遠鏡で土星を見始めたのは、17 世紀初めごろでした。この時の天文学者たちが描いた土星のスケッチが下の図です。このときは、望遠鏡の精度があまりよくなく、環だと認識していた学者はいなかったようです。

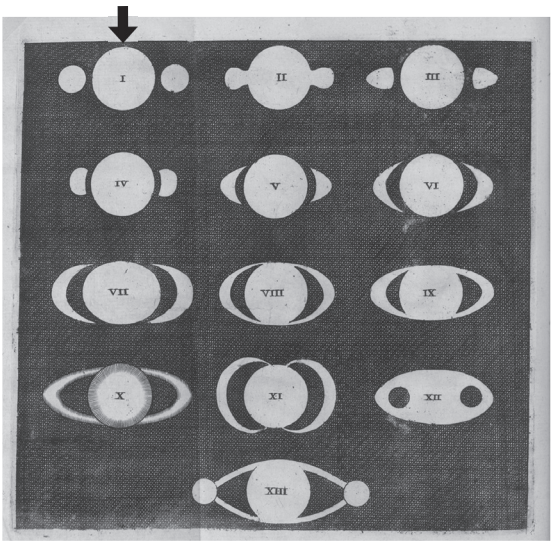
実は、1610 年に初めて望遠鏡で土星を観察したのは、イタリアの天文学者のガリレオ・ガリレイでした。彼は土星の両側に月のようなものがあると考え、図の⬇のようにスケッチしました。これを「土星に耳がついている」と表現したそうです。

この土星の耳を環だと唱えたのは、オランダの物理学者のクリスティアーン・ホイヘンスでした。ガリレオが土星を望遠鏡で観察してから 45 年後、1655 年のことでした。ホイヘンスは、長さ約 3m もある長い望遠鏡を自ら作り、その望遠鏡で土星を観測しました。ガリレオが使っていた望遠鏡よりも精度がよく、土星に環があることを、さらには土星の衛星（えいせい）までも発見しました。その後、望遠鏡が発達し、今では土星の環が一枚板ではなく隙間（すきま）があることや、氷やチリで形成されていることなど、様々なことがわかっています。

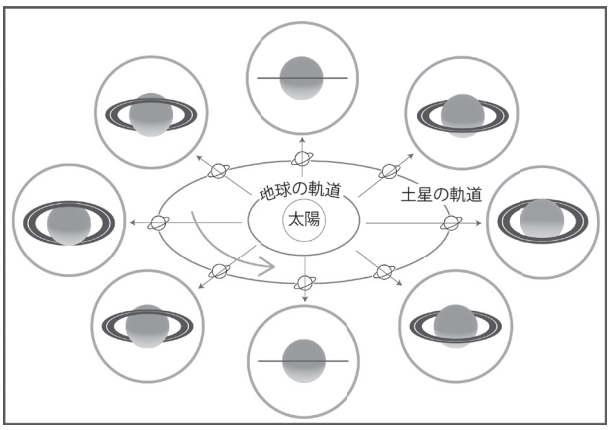
このような土星の環ですが、地球から観察していると、環が見えなくなる時があるのです。これを「環の消失」と呼びます。とはいえ、実際に環がなくなってしまうわけではありません。土星の環は薄く、横から見るとスジのように見え、わかりにくくなります。土星の公転（こうてん）周期は 30 年、土星の環を横から見る機会はその期間のうち 2 回あるので、15 年ごとに「環の消失」が起こるのです。土星は太陽の周りを常に回っているため、環の見える様子が少しずつ変わります。今と同じような土星の環の様子を見るためには、30 年も待たなければなりません。

毎年様子を変える土星を、過去の科学者たちのように観察してみてはいかがでしょうか？

（村井太一）




引用：Huygens, Christiaan. 1659. Cristiani Hugenii Zulichemii, Const. f. Systema Saturnium : sive, De causis mirandorum Saturni phaenomenon, et comite ejus Planeta Novo., Hagae-Comitis : Ex typographia Adriani Vlacq.




土星の環の変化



〒 183 – 0026 東京都府中市南町 6 – 32
TEL 042 – 368 – 7921
府中市郷土の森博物館
http : //www.fuchu-cpf.or.jp/museum/